



神奈川県

KANAGAWA

第48回「全日本中学生水の作文コンクール」 神奈川県優秀作文集

水について考える

令和8年7月



「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご両親や先生方から学び聞いた話をもとに、水について考えていただくという趣旨で、昭和54年から「水の週間」の行事の一環として実施しています。

神奈川県では、平成19年度に水源環境保全・再生施策の取組みがスタートしたことを機として、平成20年度から水源環境賞を創設しています。加えて、令和8年3月に「かながわ水源地域活性化計画」を改定したことを機として、令和8年度から新たにやまなみ五湖賞を創設しました。

令和8年度は、251編の応募があり、神奈川県表彰として最優秀賞1編、優秀賞3編、入選2編、水源環境賞1編及びやまなみ五湖賞3編を選定しました。

この10編について、このたび優秀作文集としてとりまとめました。いずれも、生活や学校での体験を通して、水について理解を深め、水を大切にしていこうとする中学生の皆さんの気持ちがよく表現されています。ぜひご一読ください。

第48回「全日本中学生水の作文コンクール」は、次のとおり行われました。

- 応募要領
 - テーマ…「水について考える」（題名は自由）
 - 対象…令和8年度に神奈川県内在学の中学生
 - 原稿枚数…400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - あて先…神奈川県政策局政策部土地水資源対策課水政室
 - 募集期間…令和8年3月2日～令和8年5月8日（必着）
 - 版権等…○応募作品の版権は水循環政策本部、国土交通省及び神奈川県に帰属する。
○応募作品は自作の未発表のものに限る。
○応募作品の返却は行わない。

2 神奈川県内 応募状況

応募 学校数	応募 総数	学年別（編）		
		1年	2年	3年
16校	251編	200	18	33

3 審査

- 都道府県審査 応募作品について神奈川県が審査を行い、神奈川県表彰として最優秀賞1編、優秀賞3編、入選2編、水源環境賞1編及びやまなみ五湖賞3編を選定。最優秀賞及び優秀賞の計4編については、中央審査対象作文として国土交通省に推薦。
- 中央審査 都道府県の地方審査を経た作文を対象に、中央審査会（国土交通省主催）で最優秀賞1編・優秀賞9編・入選30編を選定した。

「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年5月31日 閣議了解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他の関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

水循環基本法（平成26年法律第16号）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

目次

最優秀賞

水循環の中に見つけたつながり ……

横浜市立横浜サイエンスフロンティア
高等学校附属中学校三年 ……

前田 想悟

優秀賞

水の音が変わった日 ……

横浜市立樽町中学校二年 ……

背黒 五希

僕たちが守るべき水 ……

逗子開成中学校一年 ……

濱田 航輔

人と水の関わり ……

横浜市立篠原中学校一年 ……

松本 和憲

入選

水が届けてくれた自然の声

く鎌倉の砂浜とアカテガニ ……

清泉女学院中学高等学校二年 ……

飯田 怜衣

水の循環 ……

茅ヶ崎市立鶴嶺中学校三年 ……

小林 啓太

水源環境賞

水との関わり ……

茅ヶ崎市立鶴嶺中学校三年 ……

中村 深桜

やまなみ五湖賞

水への一步は一冊の本から ……

横浜市立篠原中学校一年 ……

五十嵐 桃

私は小さな開発者 ……

横浜市立市ヶ尾中学校二年 ……

堀野 裕愛

水を使い続けていくために ……

茅ヶ崎市立鶴嶺中学校三年 ……

米山 瑛人

最優秀賞

水循環の中に見つけたつながり

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校 三年 前田 想悟

薄暗い竹林の中で、私はのこぎりを握り、ヘルメットとゴーグルを身に着け、竹を切っている。ふもとの街は晴れているのに、ここでは光が遮られ、湿り気を帯びたひんやりとした空気が漂っている。長く伸びた竹の先端で葉先が風に吹かれてこすれ合う音がする。私は両足でぐつと大地を踏みしめる。仲間と声を掛け合いながら、一本ずつ着実に竹を切り倒していく。これが、私がボランティアとして取り組んでいる除伐作業である。

作業が進むにつれ、林内に少しずつ光が差し込み、暗く湿っていた空間が和らいでいく。地面の土や落ち葉の様子も、次第にはっきりと見えてくる。ひと仕事を終えたことに達成感を感じながら、この変化を目にした時、私は森林の状態で水や生き物の環境にまで影響しているのではないかと考えるようになった。

なぜ私はこのような保全活動に取り組んでいるのか。その始まりは、幼い頃に見たホタルの光だ。横浜市栄区で育った私は、朝比奈の上郷自然の森の近くを流れるいちち川で、毎年のようにホタルを見てきた。暗闇の中で静かに揺れる光は、自然を愛する私の原点だ。

しかし、その光が次第に少なくなっている。なぜ、このような変化が起きているのか。

その原因を調査すると、ホタルの幼虫はタニシなどを餌とし、ホタルの個体数は餌となる生物の量に大きく依存する。さらに、タニシは水中の植物プランクトンを主な餌とし、水質の変化がプランクトンの量に影響を与え、それがタニシの個体数、さらにはホタルの個体数へと段階的に影響していく構造になっている。つまり、水質の変化が食物連鎖を通じて、段階的に生態系に影響を及ぼしているのだ。

さらに、ホタルの幼虫が生息する草むらの減少や、外来種の増加などの周囲の植生の変化が、水の状態や生物の生息環境に影響を与えていた。

川の水だけではなく、川の周囲の環境も含めた複合的な要因が、水質を左右するのである。

さて、改めて私の除伐作業を見つめ直すと、森林の状態で水環境に与える影響がより具体的に理解できる。密集した竹を間引くことで林内に光が差し込み、下草や低木が育つようになる。すると、根や落ち葉によって土壌が発達し、水が浸透しやすくなる。さらに、土壌による過剰な水が湧くことで、水の濁りや栄養分の流出が抑えられ、水質の安定につながる。このように、森林の整備は水を蓄え、浄化し、安定して供給するという極めて重要な役割を担っているのである。

神奈川県では、私たちが日常的に使っている水の多くが、丹沢山地などの水源地域の森林によって支えられている。丹沢山地は多様な動植物が生息する生物多様性の豊かな地域であり、その豊かな自然が水を蓄え、育みながら、私たちの暮らしを支えている。山に降った雨は森林に蓄えられ、時間をかけて川へと流れ出し、やがて人々の生活の中で利用されている。その背後には、丹沢山系に抱かれた神奈川県全体の豊かな水と森のつながりが広がっている。そうした大きな自然の一部として自分の地域があることに気づいたとき、この環境を守り、未来へつないでいきたいという思いが一層強くなった。

森林での除伐という一見小さな活動も、水を蓄え、浄化し、安定して供給するという大きな水循環の一部である。丹沢山系に支えられた神奈川県の水環境も、自然を愛する団体や市民ボランティアの一人一人の切なる想いの積み重ねによって成り立っている。

私はこれからも、この地域の自然と向き合いながら、森林と水のつながりを意識した行動を続けていきたい。そして、自分の体験や学びを発信し、水と森の大切さを多くの人に伝え、この環境を未来へとつないでいきたいと考えている。

水の音が変わった日

横浜市立樽町中学校 二年 背黒 五希

私は水が好きだ。夏になると、水の中にいる時間が増える。市民プールで泳ぎ、毎年キャンプで道志川に入る。川の水は驚くほど冷たく、足を入れた瞬間、思わず声が出る。流れに身をゆだねると、体がすつと軽くなり、どこまでも運ばれていくような気がする。川の流れは、離れているときは雨のように聞こえ、遊んでいるときは、光や暑さ、セミの声にまぎれていった。息を止めて潜ると、外の音が遠のき、静かな世界になる。その中で目を開けると、川底にはニジマスやアユが泳ぎ、光がゆらゆらと揺れている。とてもきれいだ。何度も岩から飛び込み、流れに乗って笑う。水は、私にとって「楽しいもの」だった。

そんな私の水のイメージが大きく変わったのは、能登半島地震のときだ。母の実家がある金沢にいたとき、緊急地震速報の後、突然の大きな揺れがあった。家族で避難し、安全が確認されてから祖父の家に戻ると、しばらくして水が止まった。蛇口をひねっても、いつものような水の音はせず、水は出てこない。その静けさが、かえって不安を大きくした。

母と一緒にスーパーへ水を買に行ったが、棚には一本の水も残っていなかった。お茶やスポーツドリンク、ジュースは並んでいるのに、水だけがない。その光景を見たとき、水はただの飲み物ではないのだと気づいた。水は、飲むだけでなく、料理や手洗い、トイレなど、生活のすべてに関わっている。だからこそ真つ先に必要とされ、なくなってしまうのだ。家に戻っても、水は出ない。手を洗うことも、顔を洗うこともできない。トイレの水も気にしながら使う。たった一日でも、生活は大きく変わった。これまで何も考えずにしていた行動の一つ一つが、水に支えられていたことに気づいた。水がないということは、「不便」ではなく、「不安」だった。

道志川で感じていた水とは、まったく違うものだった。あの子の水は、流れに乗って遊ぶことのできる楽しい存在だった。しかしここで失

われた水は、生活を支えるために欠かせないものだった。同じ水なのに、こんなにも意味が違うのかと驚いた。それ以来、私は水の見方が変わった。普段の生活でも、水を意識するようになった。米のとき汁は捨てずにプランターの野菜の水やりに使う。お風呂は家族で続けて入り、残り湯も活用する。食器は水をためて洗い、流しっぱなしにしない。洗濯にはお風呂の残り湯を使う。特別なことではないけれど、水を「使う」というより、「無駄にしないように回す」感覚になった。考えてみると、水はいつも姿を変えながら、私たちのまわりを巡っている。道志川の水も、もとは空から降った雨だ。その水が川となって流れ、やがてどこかで人の生活を支える。私が使った水も、見えないところで誰かにつながっているのかもしれない。私は以前、水は「あるもの」だと思っていた。しかし今は違う。水は、ただそこにあるのではなく、私たちの暮らしを支えている存在だ。そしてそれは、自然の循環だけでなく、水を届ける仕組みや人の働きによって成り立っている。だからこそ、水が止まったとき、私たちは安心も一緒に失ってしまうのだ。水は暮らしを支えるしくみであり、私たちの命そのものだ。

水は色も形もなく、普段は意識することが少ない。でも、その見えないう存在が、私たちの生活を静かに支えている。道志川で感じた楽しさも、断水で感じた不安も、どちらも水がもたらしたものだ。その両方を知った今、私は水をただ消費するのではなく、大切に使い続けたいと思う。蛇口をひねれば水が出る。その当たり前の中に、安心がある。水とは、私たちの暮らしを支える「見えない安心」なのだと、私はあの日、はじめて知った。それ以来、水の音は、少し違って聞こえるようになった。

優秀賞

僕たちが守るべき水

僕は、朝起きてトイレに行き体を軽くしてから、健康のためにコップ一杯の水を飲むのが日課です。朝食の後は歯磨きをして、ぬるま湯で寝癖を直します。大好きな学校に行くまでの間にも、様々な用途で水を使います。僕の学校はすぐそばに海があり、海洋教育を特色としているため、水との関わりが深く水に恵まれた環境だと思っていました。しかし、よく考えてみると、海水は生活用水には使えないことに気づき、逗子市の水はどこから来ているのか興味がありました。

調べてみたところ、逗子市の水は主に二つの大きな河川から取水されていることがわかりました。一つは相模川水系、もう一つは酒匂川水系です。相模川の水は寒川取水堰を通り、寒川浄水場に運ばれます。いくつもの処理工程を経て安全で良質な水がつくられ、逗子市などの様々な地域の蛇口に届けられています。日本の水道水は、細菌や有害物質の基準が法律で厳しく定められているため、日本は「水道水がそのまま飲める国」として世界的にも知られています。

逗子市に水を供給している浄水場の一つである、寒川浄水場の近くにある神奈川水道記念館を見学しました。特に印象に残ったのが「神奈川に水道がやってきた」の映像で、日本で最初に鉄管を使った近代水道がひかれたのは神奈川県であることを知りました。現在のような水道管が整備される前は、井戸や川で水をくんで風呂などに使っていて、大変な労働でした。汚れた水が原因で病気になることもあり、飲み水は水屋から水を買って飲んでいたそうです。昔は水がとても貴重であったため、お土産にしていたと聞き、今の生活では考えられないと驚きました。

浄水場に必要なお水を河川から取り入れるために、水位を調整する役割をもつのが取水堰です。五月の連休、神奈川水道記念館でもらったダムカードに載っていた寒川取水堰を訪ねてみました。そこには、たくさん白い鳥が集まっていました。よく見てみると、水面に無数の魚が水の

逗子開成中学校 一年 濱田 航輔

流れに逆らって飛ぶように泳いでいて、その魚を白い鳥が捕えています。ダムカードの解説から、鮎をはじめ、ウグイやカニなど多くの生き物のために魚道が設置され、生まれた川へ戻るよう工夫されていることを知りました。その取り組みの結果、相模川は鮎をはじめとする多くの生き物が生息する、豊かな水系になりました。このことから、人の手で適切に管理することの大切さを学びました。

現在、三十年に一度の少雨の影響で全国的に水不足の心配が高まっており、神奈川県ではダムの貯水量が低下するなどの影響が出ていて、節水を呼びかける報道もされています。僕はこのような事態になるのは初めてなので、生活がどれくらい変わってしまうのだろうと不安な気持ちになります。節水とは、水をむだにせず大切に使うことですが、日々の生活では水を汚さないということも大切になってきます。そのために料理の後片付けの際に、読み終えた新聞紙で油污れを拭い去ってから洗うことや、環境にやさしい洗剤を使うことを心掛けるなど、自分にできることを考えて、実行していくことが大切だと思います。

学校から見える海は、日の光を浴びるとコバルトブルーに輝いていて、その景色を見ると新鮮な気分になります。その海には、逗子市の生活排水が下水処理施設を通じて流れ込んでいます。下水処理施設のおかげで、多くの生き物が住むきれいな海が保たれています。しかし、処理できる水の量には限りがあるため、普段から水を汚さないよう配慮する必要があります。無限に広がる青い海は、水質を守ってきた人々の努力のたまものです。この海の美しさを保てるかは僕たちの水に対する意識と取り組みにかかっていると思います。

優秀賞

人と水の関わり

横浜市立篠原中学校 一年 松本 和憲

人と水との関わりは、僕たちが想像する以上に深く、そして密接だ。その例として、まずは僕の記憶に刻まれている一つの光景を挙げたい。それは、ラグビーの合宿で訪れた長野の山奥での経験だ。厳しい練習の合間に、冷え切った蛇口から溢れ出る水を口にしたとき、その驚くほど澄んだ冷たさと、微かな甘みに衝撃を受けた。渴いた身体に染み渡るあの感覚は、単なる喉の渇きを潤す以上の、生命の根源に触れるような瑞々しい記憶として今も鮮明に残っている。しかし、この「至福の一杯」という当たり前の恩恵が、今、環境破壊や気候変動という、静かな脅威によって危機に瀕している。

小学四年生のとき、僕は社会科見学で「宮ヶ瀬ダム」を訪れた。そのダムの、巨大な堤体の前に立ったとき、僕はその存在感に息を呑んだ。ダムは単なる貯水槽ではない。下流に住む人々の命を水害から守り、生活を照らす電気を作り出し、社会の営みを支え続ける。いわば、僕たちの暮らしを維持するための「社会の心臓」としての機能を果たしていたのだ。

その次の社会科見学で訪れた「神奈川水再生センター」では、役目を終えた水が再び自然へと還っていくための緻密な工程を目の当たりにした。異臭を放つ濁った水が、高度な技術と多くの人々の工夫によって清流へと磨き上げられていく様子は、まさに驚異的であった。また、休日には母と妹とお台場にある「東京都虹の下水道館」にも足を運んだ。ここでは下水道の仕組みを、ドラマを通して学んだり、水道局で働く人の仕事の一端を体験したりした。

これらの施設で共通して痛感したのは、蛇口の向こう側には、想像を絶する巨大なインフラと、それを支える多くの人々の献身があるという現実だ。地球上に存在する水のうち、人類が利用可能な水はわずかパーセントに満たない。この限定的な資源を、僕たちはあたかも無限であ

るかのように思い込んで浪費してはいないだろうか。

僕は昨今の「令和の米騒動」とも呼ばれる事態で、水の「循環の断絶」に対する恐怖を、改めて認識した。記録的な少雨は大地を乾かせ、作物の実りを奪い、僕たちの食卓にまで影を落とした。この時、守るべきは直接的な飲み水だけではないことに気づいた。一粒の米、一株の野菜の背後には、必ず豊かな水の循環が存在している。僕たちは間接的に「水を食っている」と言っても過言ではないのだ。

ここで、僕が幼い頃から親しんできたドラえもんの一編、「水玉カプセルの旅」という話を思い出す。水の一生を秘密道具で追体験し、「水を守らなければならない」と心から決意するのび太の姿は、今の僕の心情と深く共鳴する。上流の山々が荒廃すれば、あの長野で感動した清冽な水も、ダムが蓄える豊かな水も失われてしまう。のび太が抱いた危機感は、空想の世界の話ではなく、僕たちが今まさに直面している喫緊の課題なのだ。この水を守るために僕たちにできることは、排水口に油を流さない、あるいは節水を心がけるといった、些細な行動かもしれない。しかし、今の僕たちが最も重んじるべきは、効率や利便性を追求するあまり失われつつある「適当よりちよつとの面倒をする精神」ではないだろうか。食器を洗う前に一度汚れを拭き取ること。シャワーを無意識に流しっぱなしにしないこと。その数秒の慎みと手間が、未来の地球へつながる一滴になると信じて、僕は今日から、自負を持って「ちよつとの面倒」を積み重ねていきたい。

水が届けてくれた自然の声―鎌倉の砂浜とアカテガニ―

清泉女学院中学高等学校 二年 飯田 怜衣

私は、鎌倉の海と山に囲まれた街で育ちました。毎朝、海沿いを走る江ノ電という電車に乗り通学しています。私にとって、海は小さい頃から身近な場所です。夏には家族で稲村ヶ崎の砂浜で遊び、冬には海岸から夕日にそまる富士山を眺めました。そんな景色は、私にとって「当たり前」のものでした。

最近、その当たり前の景色が少しずつ変わってきたことに気づきました。子供の頃よりも、砂浜がせまくなっているのです。前はもっと広がったはずの砂浜が、今では、座る場所もなくなっています。最初は「今日はたまたま潮が満ちているのかな」くらいに思っていました。でも、テレビで気候変動や環境問題についてのニュースを観てから、これは海だけの問題ではないかもしれないと思うようになりました。そこで私は、鎌倉の街を流れている「水」に注目してみることにしました。

鎌倉には、大きな川はありません。街の中心を流れているのは滑川（なめりがわ）という小さな川です。山に囲まれた鎌倉の谷戸と呼ばれる谷からわき出た水が集まって、街を通り、海へと流れていきます。私は今まで、この小さな川が、あの広い砂浜と関係しているなんて考えたこともありませんでした。

調べてみると、砂浜の砂はどこからか急に出てくるわけではないことがわかりました。山に雨が降って、その雨水が岩や土を少しづつつけずり、川がその土砂を海まで運びます。そして、波がそれを岸に打ち寄せることで、長い時間をかけて砂浜が作られるのです。つまり、砂浜は山から海へとつながる水の循環によって生み出されるのです。

しかし今、その循環がくずれています。私は実際に、近所の河口へ行ってみました。そこで母との会話に出た、昔の話を思い出しました。

「あなたたちが小さい頃は、河口近くの泥地に『アカテガニ』がたくさんいたよね」赤いハサミが特徴的なそのカニは、昔は鎌倉の川のいたるところで見られていました。しかし、私が見た今の河口は、護岸がコンクリートで固められ、カニが隠れられるような泥地はほとんど残っていません。砂浜がせまくなっているだけでなく、そこに住んでいた生き物たちも姿を消しました。その事実には、私はショックを受けました。インターネットで調べると、街を便利にするために川をコンクリートで整備したり、地面を舗装したりしたことで、山から海へ流れる砂や泥の量が減り、カニたちの居場所も奪われてしまったのです。さらに、気候変動による豪雨は、せつかくたまった土砂を一気に沖へ流してしまうことがあることも学びました。

水は、私たちが飲むためだけにあるわけではありません。カニのような小さな命を育み、砂を運び、私たちが大好きな景色を守ってくれています。鎌倉の海岸から砂浜が少しずつ消えていることは、身近な水の循環に何かが起きているという、自然から人間への小さな、知らせなのかもしれない。

百年後の鎌倉の子どもたちにも、今の私と同じように裸足で砂浜を走ったり、波打ち際で遊んだりできる未来を残したいです。そして、いつかまた、河口に、たくさんのアカテガニが戻ってくるような環境を取り戻したいです。

普段、当たり前のように使っている水が、実は山や川、そして海や生き物へとつながっている。そのことを忘れずに、まずは自分に何ができるのかを真剣に考えていきたいと思います。

水の循環

茅ヶ崎市立鶴嶺中学校 三年 小林 啓太

私の住んでいる家の近くには小出川という川が流れています。以前、私はクラスで飼う魚を用意するために、この川の上流へ出かけたことがあります。上流であれば水もきれいで、多くの魚がいるだろうと期待していたからです。しかし、現地に着いて目にしたのは、期待していたものとは全く違う光景でした。川岸や水面には、プラスチック容器や古びたタイヤ、家庭から出たと思われる粗大ゴミがいくつも沈んでいました。魚が潜んでいそうな場所にもゴミが溜まっており、釣糸を垂らす前に、その汚染された状況に強いショックを受け、とても悲しい気持ちになりました。

この経験を通して、私は水の問題を自分自身の課題として捉えるようになりました。それまでは、蛇口から出る水と、目の前を流れる川の水は別物だと考えていました。しかし、私たちが川に捨てたゴミは水質を悪化させ、巡り巡って私たちに對して牙を剥きます。小出川の上流で見たゴミは、誰かが「自分一人くらいなら大丈夫だろう」という軽い気持ちで捨てたものかもしれませんが、しかし、その積み重ねが川の汚染につながり、生き物が住めない環境を作り出しているのです。

私はこの日を境に、日常生活における水の扱い方を改めました。まず徹底したのは、ゴミの分別とポイ捨てを絶対にしないことです。川を汚す原因の多くは、私たちの生活圏から流れ出すゴミであることを学んだからです。また、家庭内でも、食べ残しをそのまま流しに捨てない、洗剤を使いすぎないといった、水質の汚染に係る行為はやらないというルールを家族で決めました。

さらに、水そのものの使い方も変わりました。かつては、一度汚れた水も浄水場で処理されれば元通りになると安易に考えていました。しかし、一度汚染された水を再び私たちが利用できる状態にするには、多くの時間とお金がかかります。小出川で見たゴミを取り除く大変さを想像

すれば、最初から汚さないこと、そして使う量を最小限に抑えることがいかに大切かがわかります。

小出川の上流での体験は、私に「水は循環している」という事実を分からせてくれました。川が汚れば、それは私たちの生活を支える基盤が壊れてしまうことを意味します。中学生である私にできることは限られています。まずは自分自身が川を汚さない一員となり、節水を心がけることから始めたいと思います。身近な小出川をきれいに保つ努力を続けることが、将来にわたって豊かな水資源を守ることにつながると信じています。

水源環境賞

水との関わり

私たちにとって水は、生活に必要不可欠なものである。顔を洗ったり、喉を潤したりなど日常のあらゆる場面で水が使われる。

しかし、私たちはそれを当たり前だと考えている。その水はどこから来たのか、誰がどのようにして水を綺麗にしているのか、知らないことがたくさんある。

最近降水量が少なく、ダム貯水率が例年以下となっている。そして、貯水率が〇パーセントになってしまったダムもあるということを知った。少し気になり、私の普段使っている水はどこから来ているのか。また、そのダムの貯水率は今どうなっているのかを調べた。すると、そのダムの貯水率は約三十から四十パーセント程度で推移しており、通常の年と比べて大幅に低下してしまっていることを知った。

また、このダムは、私が住んでいる県の約三分の二に供給されていて、貴重な水源となっていることが分かった。

だが、渇水の影響で水が使えなくなってしまうことはなく、地域の自治体で節水などの呼びかけを行っているところも見ることがない。だから、水が例年より少なく、不足しているという実感はあまり湧かない。

先日、総合的な学習の時間で講演してくださったオスマン・サンコンさんの出身国であるギニアなどの西アフリカは降水量が非常に少ないと仰っていた。そこで、水が不足しているギニアなど、西アフリカの国々における水との関わりについて調べた。

西アフリカ諸国では、国にもよるが、都市部でも上下水道が整備されていないところもあり、上水道が整備されていても、水質管理は良い状態とはいえない。地方では川の水や井戸水を使用しているところがある。川に水を汲みに行くのは、主に女性や子供が毎日数キロ歩いて行っている。しかし、川などは衛生環境が悪いところが多く、安全な水へのアクセスが制限されている。そのため、多くの人々が汚染された水を飲まざるを得ない状況にある。不衛生な水の中には、メジナ虫という寄生虫がいることがあり、この虫を病原体とした感染症もあるらしい。また、エボラ出血熱という感染症が二〇一四年に西アフリカで流行し、一万人以上が死亡した。患者の血液体液に直接触れることで感染し、水場の汚染が感染拡大の要因となった。

このように、西アフリカでは毎日早い時間から川に水を汲みに行き、生きるために汚染された水を飲んでいいる。また、汚染された水による感染症は多く存在し、いつかかってもおかしくない状況にあるということが分かった。

それに比べると、日本の水は世界トップレベルの厳しい水質基準と、山間部から流れる良質な水源、そして効率的な浄水・配水インフラによって非常に綺麗で安全である。水道普及率は九十八パーセントを超え、蛇口から直接飲める貴重な国の一つとなっている。このように、いつでも綺麗で安全な水を使えることは当たり前ではない。そして、他国と比べてもとても恵まれていることが分かる。また、水は大切な限りある資源であり、地球温暖化による干ばつなどの様々な課題に取り組むために、節水などを行って無駄遣いをなくし、効率的に使っていく必要がある。

茅ヶ崎市立鶴嶺中学校 三年 中村 深桜

やまなみ五湖賞

水への一步は一冊の本から

きっかけは、ある本でした。小学三年生の時、読書感想画で読む本を決めるために父と本屋さんに行き、そこで、ある本を手に取りました。その本は題名に「プリンセス」が入っていて、甕を持った女の子のイラストが印象的でした。その本をきっかけに、「水が日常的に飲めない人がいる」という事を私は初めて知りました。

私たちは様々なところで水を使っています。飲み水だけでなく、お風呂や料理、洗濯など、清潔な水が蛇口をひねればいつでも手に入ります。でもこれらは「当たり前」ではないのです。私が読んだその本は、モデル活動をしている方の小さい頃の経験談に基づいて書かれたものでした。そこには、日が昇る前から大きな甕を頭の上に乗せ、一日かけてお母さんと水を汲みに行く女の子の日常が描かれています。けれど大変な思いをしてやつとの思いで調達した水も、飲めるようなものではない泥水。そんな事が、私の住む地球上で起きているとは信じられませんでした。

その後、私は父と宮ヶ瀬ダムに行きました。最初は遠出することに乗り気ではありませんでしたが、向かって待ち構えていたのは、大きなダム。私が今まで使っていた水は、こんなに大きな施設を通して来ているのか、と驚嘆しました。

そこで私は、ダムについて調べました。ダムは、川の流れをせき止めて貯める巨大な構造物です。ではなぜ、自然を流れている水が、清潔な水になって届くのでしょうか。そこで知ったのが「浄水場」の存在です。浄水場では、どのような過程を経るのでしょうか。浄水場では、川から取り込んだ水に薬品を入れて汚れを固め、沈殿・砂の層でろ過し、塩素で消毒して飲み水にしています。特に汚れがひどい場合は、「高度浄水処理」という特別な方法でより安心・安全な水にして各家庭に届けてくれます。日本では、この工程を毎日全国で行っているから、安心・安全な水を使う事ができるのです。さらに私たちの住む横浜市は、特に水質に

横浜市立篠原中学校 一年 五十嵐 栞

厳しく、問題がないかうまくチェックされた水が水道管を通って、各家庭に届きます。

でも、この私たちにとつての当たり前は、世界では通用しません。水道水を飲める国は、日本を含め十数カ国と言われています。私が出会った本のように、長い時間をかけても綺麗な水が手に入らない地域もあるのです。国際的に安全な水を使用できない人は、四人に一人。そして、不衛生な水が原因で毎日六千人の子供たちが亡くなっている現実には、胸が締め付けられます。

この痛ましい現実には私たちは、何ができるでしょう。私が考えたことは二つです。一つ目は募金です。募金は私たちがよく行くコンビニや、ネットを通じて、少額からでも支援できます。少しの積み重ねで安心・安全な水を届ける事ができます。二つ目は、この現状を正しく学んで、より多くの人に広める事です。この現状を正しく理解している人は、そう多くはないのではないのでしょうか。私もあの本に出会わなければ、「水は使えることが当たり前」と思い込んでいたはずでした。現状を知り、深く考える事が、これから先の未来を変える事に繋がると、私は思います。

皆さんは、SDGsを知っていますか。二〇三〇年までに、持続可能でより良い世界を目指す、十七の目標のことです。「安全な水とトイレを世界中に」。こんな目標があります。私は残りの四年間で、少しでも多くの方が安心・安全な水を手に入れられる世界を作りたいです。私一人ができる事は小さな事です。世界中の人々が現状を知り、少しずつ行動に移す事で、救える命がいくつもあります。皆さんも、私と一緒にその一步を踏み出しませんか。

やまなみ五湖賞

私は小さな開発者

「ああー」気持ちが良いすぎて思わず声が漏れる。

「やっぱり源泉かけ流しって最高だね。」

私の家族は温泉が大好きで、連休になると必ずといってよいほど、温泉旅行に出かけている。今回の春休みに訪れた鳴子温泉郷も、至る所で沢山の温泉がこんこんと湧き出ていた。

「そういえば、宮ヶ瀬ダムが危機なんだっけ・・・。」

ふと、私が住む横浜市の大事な水源である宮ヶ瀬ダムの今年の貯水率が二十五パーセントで、過去最低レベルの渇水というニュースが頭をよぎった。

「鳴子温泉の泉質は飲用することもできるくらいだし、この溢れ出る温泉水を生活水として利用することはできないだろうか？」

知識のない私は、温泉水をろ過すれば、せめて下水として活用し、現在全国各地で起きている水不足を、少しでも解消することができるかもしれないと考えた。

後日私は、宮ヶ瀬ダムの情報収集と共に、温泉水や、以前から気になっていた、海水を生活水として利用するためにはどのようにすればよいのかについて調べてみた。すると、温泉水は成分により配管を詰まらせ、機器故障を起こす原因となったり、海水は、除去された濃縮塩水の廃棄に伴う環境汚染等の問題により、そう簡単に実用化できないことが分かった。確かに、中学生の私が考える程度の発想は、当然のように既に研究がされ尽くされていて、様々な理由から水不足の代替手段としてあまり利用されていなかったのだ。まだまだ自分の知識の浅はかさに悲しくなった。

そして、宮ヶ瀬ダムについては、ダム建設前にあった沈んだ村が、今回の水位低下により、四十年ぶりに顔を出したという。ダム建設が開始された一九八七年に約二百八十一世帯もの人が移転を余儀なくされたそ

横浜市立市ヶ尾中学校 二年 堀野 裕愛

うだ。その方たちの努力や涙があったからこそ、私たちは安定した水を確保することができている。更に洪水からも守られ、毎日の安全な暮らしが送れているという、感謝をしなければならぬ事実も知った。

「よし、こんなことでめげてはいられない！」

相手は自然、まずは目の前の宮ヶ瀬ダムの貯水率を、平常時の八十八パーセントまで戻せずとも、減るペースを落とす努力から始めてみよう。中学生の私にでも簡単にできる、当たり前前の「節水」という小さな意識改革から。そして、日頃からの

「これって何かに利用できないかな？」

の問いの答えが、いつの日にか実を結べる日を夢見て・・・。

やまなみ五湖賞

水を使い続けていくために

いつも私たちの身近にある水。私たちが生きていくためにも、スポーツをしていくためにも、水がなければ、私たちは何もかもできない。日々、水を使わずに生活している人は存在しない。水がなければ、喉を潤すことができない。水がなければ、お風呂に入ることができない。水がなければ、米を炊くことができない。どれほど水が私たちの生活と密接に関わっているのかわかるだろう。私はサッカーをしている。夏の暑い日の練習では一日で二リットルの水を飲んでいく。たくさん動いて汗を流した後に飲む水はとても美味しい。体に染み渡り、疲れをとってくれる。

そんな水はどこから手に入れているのだろうか。私が住んでいる神奈川県では、宮ヶ瀬ダムというところが水を供給している。宮ヶ瀬ダムは関東地方で最も大きいダムであり、まるで「私たちの心臓」のようなものだ。しかし、今そんな宮ヶ瀬ダムが危険な状況に陥ってしまっている。それは、私が休日、何気なく自転車を漕いでいた日のことだ。上には自動車用の電光掲示板があった。普段は道の渋滞状況を表示しているが、その瞬間、表示が切り替わった。「宮ヶ瀬ダム 貯水率三十三パーセント」私はこれを見て、とても少ないと思った。日本は、地球全体で見て、雨が比較的多く降る地域に分類されている。もともと日本では、山地が多く、海が近いので、水が流れ出やすいという特徴があった。それでも、今までは貯水率五十パーセントほどはあった。それなのにここまで貯水率が低くなってしまっているのはなぜなのだろう。その背景には、「地球温暖化」が大きく関係している。現在、世界では石油や石炭、天然ガスといったエネルギーが使われている。これが原因で、二酸化炭素を排出し、地球規模で気温を上昇させている。この温度上昇によって、世界の各地で異常気象が発生しており、この影響が日本まで、広がってしまったということである。

地球温暖化による水不足の影響を受けているのは、日本だけではない。

茅ヶ崎市立鶴嶺中学校 三年 米山 瑛人

世界の人も同じ状況だ。例えば、「世界の屋根」と呼ばれているヒマラヤ山脈周辺では、かなり深刻な状態である。地球温暖化によって氷河が急速に溶けて、洪水や河川の枯渇を引き起こしている。また、アフリカのサヘル地域でも温暖化の影響を受けている。近年、温暖化による気温上昇で、水源の消失が起きていることが目立っている。このままいくと深刻な飢餓問題を迎えることになってしまう。さらに、水資源を巡る戦争が起きてしまうことが予測されている。このように、地球温暖化によって生活に不可欠な水が、手に入れない状況が起きている。今のまま、私たちが何も対策をしないのなら、二〇五〇年には人口の過半数が水不足に直面すると言われている。一刻でも早く、対策をしていかなければならない。

では、私たちはどうすればいいのか。一つ目は、水を大切に使うことだ。蛇口から出てくる水を有限の物であると捉え、使っていない時は閉めるようにする。こうすることで、普段の水のありがたみがわかるようになる。二つ目は、エネルギーを無駄にしないことだ。エアコンを必要な時だけ使うようにしたら、エネルギーの節約につながる。すると、地球温暖化の進行を抑えることにつながる。

私たちが当たり前に使っている水。それを使えなくなる日が、もうすぐ来るかもしれない。水不足を解消するには、さまざまな問題を解決しなければならぬ。しかし、解決しなければ、私たちは生きていくことさえ許されない。これから、水を当たり前のように使うために、一つ一つ小さなことでも、改善していくべきなのではないのだろうか。

第 48 回「全日本中学生水の作文コンクール」
神奈川県優秀作文集

発 行 : 令和 8 年 7 月
発 行 元 : 神奈川県政策局政策部土地水資源対策課水政室
電話 (045) 285-0049 (直通)



神奈川県

政策局政策部土地水資源対策課水政室 水政グループ
横浜市中区日本大通 1 〒231-8588 電話(045)285-0049 (直通)